

女性の妊孕性温存治療後の現状と関わりからみえた課題について

茅切純子¹ 竹林七重¹ 中西佳与¹ 大内美紀¹ 池田美果¹ 谷口由貴¹ 皆吉田津子¹ 森本義晴²

¹IVF なんばクリニック ²HORAC グランフロント大阪クリニック

【はじめに】

女性のがん治療後、妊孕性温存胚を融解し移植する患者は増加する一方で、卵子凍結患者は凍結期間が延長し高齢となることも少なくない。今回、妊孕性温存治療後の現状と関わりから課題検討した。

【方法】

2012 年 1 月から 2024 年 8 月までに妊孕性温存を目的に受診した女性患者を対象とし、後方視的にデータをカルテより抽出した。

【結果】

妊孕性温存目的で受診した女性 261 名のうち卵子凍結 112 名、胚凍結 91 名、凍結できず 13 名、相談 45 名であった。がん治療後は、卵子凍結使用 11 名(9%)、胚凍結使用 48 名(52%)、廃棄(卵子 15 名(13%)、胚 14 名(15%))、凍結中(卵子 86 名(76%)、胚 29 名(31%))であった。凍結期間 5 年以上は卵子 41 名(47%)、胚 13 名(44%)、そのうち 43 歳以上は卵子 20 名(48%)、胚 4 名(30%)であった。凍結後 3 年毎に診察を行い、妊孕性看護チームが患者や家族からがん治療状況や凍結更新について意思を確認している。「高齢のため家族と相談して」と廃棄希望や、「がん治療中のため」「まだ相手がいない」「子供が欲しくなるかも」と将来の見通しがたたないまま更新希望する声があった。

【考察】

妊孕性温存目的で受診した女性 261 名のうち卵子凍結 112 名、胚凍結 91 名、凍結できず 13 名、相談 45 名であった。がん治療後は、卵子凍結使用 11 名(9%)、胚凍結使用 48 名(52%)、廃棄(卵子 15 名(13%)、胚 14 名(15%))、凍結中(卵子 86 名(76%)、胚 29 名(31%))であった。凍結期間 5 年以上は卵子 41 名(47%)、胚 13 名(44%)、そのうち 43 歳以上は卵子 20 名(48%)、胚 4 名(30%)であった。凍結後 3 年毎に診察を行い、妊孕性看護チームが患者や家族からがん治療状況や凍結更新について意思を確認している。「高齢のため家族と相談して」と廃棄希望や、「がん治療中のため」「まだ相手がいない」「子供が欲しくなるかも」と将来の見通しがたたないまま更新希望する声があった。

【結論】

凍結継続患者に対して、がん治療や高齢に伴う周産期のリスクについて、家族形成には多くの選択肢について等の情報提供方法を考え、ヘルスリテラシー向上のための関わりを実践していきたい。